小田実全集〔評論　第14巻〕

「ベトナム以後」を歩く

目次

Ⅰ「ふつうの国」としてのベトナム　7
Ⅱ「オモテ」の理想と「ウラ」の活力　27
Ⅲ チマタの人びとにとっての「革命」　51
Ⅳ「自由」と「インテリ」と「文化」　73
Ⅴ 虐殺にむきあって考える　101
Ⅵ 社会主義を根もとのところで考える　123
Ⅶ「第三世界」を根もとのところで考える　151
Ⅷ おまえのたたかいは終ったのか　173
あとがき　210

※写真はすべて、著者の撮影による。

「ベトナム以後」を歩く

I　「ふつうの国」としてのベトナム

恋人たちはどこにでもいる。ハノイで。

1　はじめに

ベトナムのことを書きたい。ベトナムの現状のことだ。ただ、この本、ベトナムの現状報告書というたぐいのものにはならないだろう。それは、まず、言っておきたい。ベトナムのこと、その現状のことを手がかりとして、いや、そのことを自分なりに考え、書くことを通じて、アジアのこと、「第三世界」のこと、それと自分との、自分たち日本人とのかかわりあいについて考え、書く。それが私がめざしていることだ。

基本の材料は、ベトナム、そして、カンプチア（カンボジア）だが、材料の「出所」は、私自身の実際のベトナム、カンプチアへの旅だ。一九八二年十月半ばから十一月はじめにかけてわずか二週間余の旅で、それで二つの国を「見た」というのはおこがましいが、それでも百聞一見にしかず、見ないより見たほうがましだということもある。ただ、この旅のことはあくまでベトナムのこと、さらに「第三世界」のことどもを考えるためのキッカケのようなもので、旅に基本をおきながらももっと自由に、思考のふり幅も大きくして考えて行きたい。ベトナムのことを考えるのは、ベトナム反戦運動に人なみ以上にかかわったこともあって、私のものごとの考え方、感じ方の根にあることだが、ただここではそういう自分のありようにこだわらずにもっと自由に、それこそふり幅も大きくして考え、書いて行きたい。

2 ベトナムのサイズ

しかし、何から書いて行けばよいのか。考えること、書くことがあまり多すぎて何から手をつけて行ったらいいのか戸惑う気持があるが、さしづめベトナムが「ふつうの国」になった、すくなくともそうなろうとしているということから書いて行こうかと思う。

この私の言い方には、もちろん、ベトナムがかつて「ふつうの国」でなかったということのありようがからみあっている。

乱暴にまとめ上げて言ってしまえば、ベトナムはかつてそのサイズ以上に大きな存在として世界にあった国だ。ここでベトナム戦争――いや、そういう言い方よりベトナムの人びとの解放を求めてのたたかいと言おう。そのほうがことの基本にも実態にもそくしているのだが、それがからみあって来るのは今さらあらためて説くまでもないことだろう。この問題で私がまず思い出すのはキッシンジャー氏の、ベトナムは今大きく世界にのさばりすぎている、もうすぐその（ちっぽけな）サイズ相応の国にしてやるぞといきまいたその決意のことだ。ベトナム戦争後、いや、ベトナム人たちに言わせると、不和はそのずっと以前からのことだったということになるが、ベトナムと確執を持ち始めた中国のえらいさんたちの眼にもベトナムはアジアでのさばりすぎていると眼に映じたのだろう。鄧小平氏の「懲罰」うんぬんの軍事行動（もちろん七九年二月に行なわれた軍事行動のことだ）も案外そんな単純なところに根があるのかも知れない。

とにかく、ベトナムはかつては、まず、民族自決、解放という世界の大義を代表していたのである。

それが倫理的な意味でのサイズの巨大さを示す事実なら、もうひとつ、世界最大、最強の国として自他ともに許すアメリカ合州国と互角にたたかうどころか打ち負かしさえしたという事実は、現実の力としてのサイズの大きさをかたちづくったにちがいない。ろくすっぽ武器も持たないようなホー・チミン・サンダルをはいた「ベトコン」の兵士のたたかいでアメリカ合州国の世界戦略に大きく穴があき、世界一の富める経済がガタガタになった。

あのころは世界のどこへ行ってもベトナムだった。よきにつけあしきにつけ、そうだったと言ってよいだろう。進歩派の国際会議にベトナム代表が出て来れば、特別に拍手がいつでもまき起こった。キューバのカストロ氏が「第二、第三のベトナムを！」と主張したのもまだ耳新しいことだ。もちろん、ベトナム人自身がその自分のサイズの大きさを意識していたにちがいない。

「たたかいは苦しくて、自分たちはほんとうを言うとやめたいくらいだ。しかし、世界の解放闘争の未来が自分たちのたたかいにかかっていると思うと、苦しくてもやめることはできない」という意味の発言を、私は何人ものベトナム人から聞いたことがある。彼らはべつにこけおどしにそんなことを言っていたわけではない。本心からそう言っていたことは、彼らがたたかいの苦しさのほうに力点をおいていたことで判った。

私は六八年に北ベトナム（当時はまだ南北ベトナムに分かれていた）へ行ったことがあってベトナム北部に関するかぎり今度の旅は二度目なのだが、六八年にハノイにしばらくいた印象をまとめ上げて言うなら、やはり、「ふつうの国」ではない国にいたという印象になるだろう。と言って、私はハノイのチマタの人びとに至るまでが自分たちの世界史的意義を自覚してアメリカ帝国主義の侵略に果

敢なたたかいを挑んでいたというようなアホウなことを言うつもりはない。ハノイに着いたときは、だいたいがベトナムの非「ふつうの国」性、そのサイズの大きさに対してやはり私が（ここで私は、リアリストを自認する私までが、とちょっときばって言っておきたい）先入観念を持っていたのだろう、歩道に店をひろげて自家製のあやしげなジュースを売るオッサンやどこかの農村からやって来てニワトリを一羽抱えて立ちん坊をするオバサンやらの「私企業」の存在におどろいて、かえって「ふつうの国」性のほうに眼が奪われたきらいがあったが、しばらくくらしているうちに、そうしたチマタの人びとにまで「抗米救国」闘争の重みがズシリと貫通しているという事実は体得できた。やはり、人びとはどこか緊張していたのである。もちろん、戦時下にあってはいずこの国の民も精神に一本筋金が入るものだが、その筋金が世界の大義にも進歩にも結びついているという確信を、たとえば、戦争中の日本人よりもはるかに持ち得ていたように思う。

当時のベトナム人と類似の事態を探せば、もっとも適切に今のきびしい状況下でのパレスチナ人の場合をあげることができるだろう。パレスチナ人にもさまざまな種類の人間がいて、なかには一羽のニワトリを後生大事に抱えて売るチマタのオバサンもいれば、子供をヨーロッパのあちこちの国に住まわせるほどの大金持の銀行家もいるが、ともに二人を貫通してあるのは、世界の大義と進歩にどこかで結びついた筋金だろうと思う。実際、私はこれまでのパレスチナ人とのかかわりあいのなかであまたそうした実例に出会っている。

3　自由と堕落

もちろん、ことはあくまで比較の問題だ。今のベトナムを日本にくらべるなら、やはり、その非「ふつうの国」性は目立つが、六八年のベトナムにくらべると「ふつうの国」になった。その感は否めない。このことは比較の問題だということについて、ガンチクのある話があるので少し横道にそれるが書いておこう。南ベトナムはホー・チミン市（言わずと知れたかつてのサイゴンだ）で私と同年輩の作家としゃべりあっているうちに、話題は若い世代のことになった。となると話の中身は決まったみたいなもので、要するに世代間の断絶。若い世代は判らん、身勝手だ、ひよわだ、堕落している、まとめ上げて言って、駄目だ。

ここで日本、ベトナム、共通の問題をかかえている（若い世代だけの問題ではない。年長者が若い世代をそんなふうに見るという問題もかかえているのだ）というふうに話をもって行くことはできるし、またそうしても決してまちがいではないが、もう少しキメこまかく事態を見ておく必要もあるようだ。

ホー・チミン市の作家は、若い世代の身勝手さかげん、判らなさかげん、駄目さかげんについての実例として、彼の知り合いの青年の例を挙げた。この青年は今年大学を出て、ホー・チミン市郊外の「公私合営」の紡績工場に就職しようとした。そのためにホー・チミン市から工場まで三十キロの道を自転車で走って支配人に会いに行ったのだが、支配人は来週来てくれと言う。次の週、彼はまた自転車で三十キロの道のりを走って工場まで行くと、支配人はまた来週来いと言う。そんなことが三度

くり返されたところで青年はついにカンシャク玉を爆発させて支配人を詰問した。毎週一度三十キロの道を自転車で走って来させて、なんの返事もしないとはなんだというわけである。この青年の怒りは、支配人をおどろかせた。彼は「抗仏闘争」、「抗米闘争」を経て来た人物で、自転車でとにかく五百キロというような距離を何度も走っているのである。三十キロの距離ぐらいそれこそなんだというわけだ。

ホー・チミン市の作家によると、これが世代間の断絶、若い世代の身勝手さかげん、判らなさかげん、駄目さかげんの実例になるのだが、三十キロの道のりを自転車で行くことで音をあげたベトナムの若者がそんなふうに叱られるなら、日本の若者はどういうことになるのだろう。もっとも叱りつける支配人のほうも自転車走行五百キロの「抗仏闘争」「抗米闘争」の戦士だ。そちらのほうもちがう。

それにしても、若い世代がその支配人の世代にくらべて、「ふつうの国」の若者になったことは事実だろう。いや、支配人自身が「ふつうの国」の人間になった。これは「抗仏闘争」「抗米闘争」の戦士が紡績工場の支配人となったこと一事が端的に示している事実だが、そうじて言って六八年に訪れたときとくらべて社会全体の空気は、やはり、あのころの社会にみなぎっていたせっぱつまった緊張感を失なっている。

このことのありようは次の二つの種類のことばによって表現できる。まず、六八年の時代にくらべて、社会がゆったりしている、ゆとりがある、自由がある。それがひとつの種類のことばなら、その今の状態を積極的に評価することばに対してもう一種類のことばとして、次のようなこと

ばをあげて行くことができる。だらけている、たるんでいる、もっときついことばを使って言うなら、堕落している。

4　ふつうの社会主義国

ベトナムという国の特質を少し乱暴にまとめあげて言えば、それがアジア――東南アジアの一国であることと社会主義国であるということになるかと思う。もちろん後者の特質についてはかつては北ベトナムだけにかかわって言えたことだが、そのころそこではさらにその特質の上に「抗米闘争」がのりかかり、戦争が全体を覆っていた。それゆえにこそ緊張感が社会にみなぎっていたのだが、今はその二つがなくなった。ということは、もろに二つの特質が姿を現して来たことだろう。ベトナムは北ベトナムをもふくめてふつうのアジア――それも東南アジアの国、ふつうの社会主義国になった、いや、すくなくともそうなろうとしている。まとめあげて言えば、事態はそんなふうなことになるだろうかと思う。前者について言うなら、六八年のベトナム――北ベトナムの社会は、たとえば、すぐ近くのタイと、やはり、どこかでくっきりとちがうものをもっていた社会だったが、今度の旅の印象は、ベトナムもなるほど東南アジアの一国だな、タイにも似ているなというものだった。

後者のベトナムの社会主義国としての特質について言えば、ベトナムを訪れるまえ、私はブルガリアにいて、そのあとパレスチナ解放闘争の人びとと会うためにシリア、レバノンにいた。ここでブルガリア論をやるつもりはないのでくわしく書くことはしないが、あれは社会主義国としてこぢんまりとまとまった、それなりにゆったりとしてゆとりのある、いわば、ふつうの社会主義国だ。ブルガリ

アはソビエトの申し子だ、ベトナムもソビエト寄りになった、さて――というようなことをここで論じるつもりはないとことわって言うのだが、かつてならその「抗米闘争」のゆえに私はパレスチナ解放闘争のほうにベトナムの近さを感じたかも知れない、それが今はブルガリアのほうにベトナムの近さを感じとっているのだ。ブルガリアが平凡でふつうの社会主義国なら、ベトナムもすくなくともそうなろうとしている。そういう感じはある。

5 ふつうの東南アジアの国

タイでもどこでも東南アジアに旅して私がいつもすぐ気づくのは、どこへ行ってもタバコ売り、食い物売り、小間物売り、はては地べたのお茶屋、うどん屋というぐあいにむやみやたらと小商人が多いことだ。いや、あれは小商人という小なりといえども「プロフェッショナル」がやっていることでは必ずしもないだろう。六八年、「抗米救国」闘争の緊張のさなかにあってさえニワトリを抱えて売っていたチマタのオバサンの事例が示しているように、素人衆が内職的に何かを売ったりするのは東南アジアではまったくありふれた、あまねく全社会にひろがって存在する現象であるようだ。

プノンペンで私の通訳兼世話係となった外務省のオバサン役人は銀行のかなりえらいさんの奥さんだった女性だが、ポル・ポト政権下の強制移住、強制労働のなかで夫を失なって、今は外務省に勤めてくらしをたてているいかにも素人っぽいお役人だった。もとのお役人たちはたいてい殺されたり死んでしまったりしているのだから、たいていが彼女同様素人衆のにわかお役人で、すれていないので感じがよかったが、彼女の家でも彼女の収入だけでは食べて行けないので、お母さんがタバコを売っ

て生計を助けている。

ただこういう民衆の「内職商人化」現象は農村に行っても存在していることで、これが東南アジアの農村を同じアジアの農村と言っても日本や朝鮮、あるいは中国などの農村とくっきり区別する特質であるようだ。都会地をはるかに離れた草深い農村に行っても、タバコ屋、食い物屋、小間物屋、お茶屋、うどん屋と並んでいて、いつもあれを見ていると、おたがいが買いあいっこをしているのでないかと思えて来て仕方がない。つまり、タバコ屋がおとなりのタバコ屋へ行ってタバコを買うというようにだ。

そこまで話を進めれば冗談だが、いったいに東南アジアの人たち、外でメシを食うのが好きと見えて、草深い農村へ行っても地べたのレストラン、お茶屋のたぐいはよく見かけるし、また、よくはやっているようだ。朝飯を家でつくる代りに一家で外のそういうところで食べるというのは日常茶飯事のことになっているみたいだし、そして、そこがどうもよく判らぬことなのだが、私の友人のタイ人などに言わせると、そちらのほうが家でつくって食べるより安上りだ。

安上りうんぬんは別として、だいたいが民衆こぞっての「内職商人化」を徹底して行なった日本の戦後の闇市育ちの私のことだ。うまいものはすべてそのころ闇市の地べたのレストランで食べたという記憶もあってか、私は東南アジアのこの民衆の「内職商人化」現象は気に入っていないこともなくて、うまいものもチマチマと一家の家庭ダンランのなかで食べるよりチマタの喧騒のなかでワッサワッサとそれこそ全民衆的に食べるほうが性にあっているにちがいない。私が東南アジアに行って何かしらホッとするのは、まさにそこにはそうした特質が社会の指導的原理として働いているからだろう。

街頭のレストランはうまい！　ホー・チミン市で。

六八年に北ベトナムを訪れたときにも、その特質は「抗米救国」闘争の本拠地においてさえ私のようなただの旅人の眼にも容易に読みとられて、大いに私を気安くさせるとともにたのもしがらせもした。今はそうした「内職商人化」的なもろもろを積極的に経済の活力として使おうとする政策のゆえもあれば（ことにこの政策は南ベトナムにおいて大々的に用いられているようだ）、社会全体の緊張のゆるみもあり、さらにこの「内職商人化」現象の雄と言うべきホー・チミン市を中心とした南ベトナムを抱え込んだ事情も大いにあずかってか、今、北ベトナムでもこの種の現象は六八年当時にくらべてさらに大きくひろがってもいれば深

まっても来ているようだ。

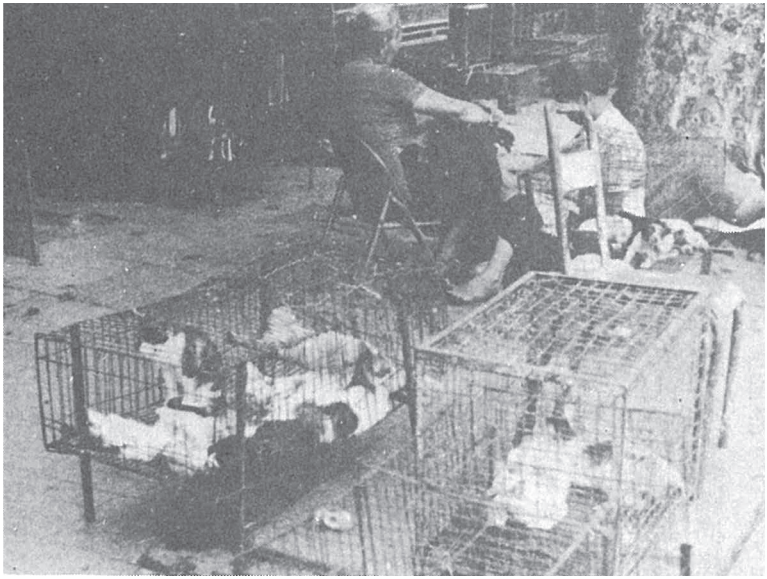
ハノイの街の中心の大きな市場のあたりは、国営店、私営店入りまじって妍(けん)を競う喧騒的空間は言うに及ばず、すべてがそういう現象の花盛りとでも言うべき一画だ。オミヤゲ屋、タバコ屋、カバン屋、キセル屋、古本屋、小間物屋、乾物屋、トケイ屋、荒物屋、それからもちろん食い物屋、地べたのレストラン、お茶屋、ニワトリ売り、野菜売りに入りまじって街頭の床屋から似顔絵描き屋までがあってそういうくだらぬもの好きの私をいたく感動させたのだが、こういう自主独立、自力更生の民衆レベルの「私企業」に対するベトナム社会主義の基本の態度は、六八年に訪れたときに政府のえらいさんが言っていた「私たちの社会主義はそういう小さなことは放っておいて、大きなことだけ決めて行く社会主義だ」うんぬんのことばにつきるようだ。

それが戦術的、戦略的なものであって、いつかはすべてが国営となってレッキとした国家公務員たる似顔絵描き屋までが国家計画経済のワク組みのなかに入って似顔を描くことになるか、それともこの東南アジア的特質を生かして新しいタイプの社会主義をつくり出して行くことになるか、それはまだ彼ら自身にも判然としていないことであるように見えたが、このところ彼らがとっている政策は、さっきもふれたようにこういう現象を社会主義経済建設のための活力として積極的に使って行こうとすることにあるようだ。このあいだの旅で会った党のかなりな地位にいる人物が口にした「国営の企業の生産だけでは全人民の需要にみあうだけ物をつくれませんよ。私企業がつくって売ってくれるから経済はもっているのです」うんぬんのことばは、ここらあたりの事情をかなりうまく説明しているようであった。

「北」がうち見たところ社会主義経済が七分なら三分がそういう民衆の「内職商人化」的資本主義経済であると見えたが、「南」の場合となると、形態はまさに逆転するにちがいない。いや、「南」の場合は前者は今やっと始まったばかりだというのがいつわりのない実態で、これを「ネップ」と言いたいところだが、それよりはむしろ日本の戦後の闇市的大混乱に似ていると言ったほうがことのありようにそくしているだろう。と言って、私はそれだから駄目だと言っているのではない。あの戦後の闇市的大混乱、たしかに大混乱は大混乱だったが、以後の日本経済発展のひとつの原動力となったことも否めない事実だ。

経済のありようのくわしいことはこれからおいおい述べて行くことにして、「内職商人化」現象の雄であるホー・チミン市のさまをここで少し述べておこう。かつての日本の戦後の闇市に物は何でもあったように、この今やベトナム建国の父の偉大な革命家の名をいただく人口三百五十万（解放前は四百万だったという）のベトナム一の大都会には物資は何でもあって、この民衆レベルにおける「私企業」は解放前にもましてたいへんな活気を呈しているようだ。ここらが歴史の皮肉なところかも知れないが、「解放」とともに「ガソリン・キング」とか「ライス・キング」とか呼ばれていたような私企業の巨人どもは自ら国外におん出て行くか、そうでなかったら「公私合営」という社会主義のワクをはめられてしまったので、そうした巨人に頭を押さえつけられていた民衆レベルの「私企業」がかえってわが世の春となって大活躍中だという。それが政府のえらいさんたち自身の判断であった。

さっき述べたハノイの「私企業」の各店に加えて、どこからどう入って来るのかジョニ黒、ジョニ赤、ナポレオンを売る露店もズラリと並び（ただし、気をつけないとニセモノをつかまされる）、食い



ホー・チミン市のネコ屋

物屋のほうも街頭のカフェの数も圧倒的に多くてにぎやかなことおびただしいが、私がもっとも感銘を受けたのは小鳥、犬を売る露店の一角にネコ――それもただの駄ネコとしか見えぬネコを売るネコ屋が何軒もあったことだ。いくつになってもわれながら浅ましいほど好奇心が旺盛で、こういうときには誰にでも何でも訊ねることにしている私とネコ屋のオッサンとのカタコトの英語による対話は以下のごとし。参考までに書き記しておく。

"How much?"

"Big one or small one?"

"Small one."

"O.K. 90 dong."

"Big one."

"O.K. 150 dong. Very, very, cheap, You buy, O.K.?"

"I'll come back later."

「ドン」(dong) はベトナムの通貨の単位で、公定のレートで換算すると、一ドルが九ドンか十ドン。闇レートで行くとなると、百ドン近くになる。それはホー・チミン市での場合で、ハノイのドルの闇値はもう少し安くて八十ドンぐらいか。

6 「人間ですから」

こういう社会のことのありようが二様の動きを社会につくり出すのは当然のことだろう。ひとつはまず、社会に活力、自由がみなぎる——とまではまだまだ行かないにしても、ゆとり、くつろぎが出る。もちろん、市民が何の制限もなく自由にのびのびと、そしてゆたかに生きていると言ってはウソになる。とことんのところでベトナムはホー・チミン市といえども今社会主義を「国是」とする国で、その社会主義の「国是」のなかにはどういうわけからか（と私はいつも思う）他のふつうの社会主義国同様自由の制限が当然のごとく入っていて、市民のくらしも基本のところでその「国是」のワク組みのなかにあるし、もうひとつ、くらしむきのこととなると、物はあまたあれど庶民にとっては先立つものはたいしてなしで貧しいのだ。そこへもって来て、ホー・チミン市の場合となると、いい仕事を見つけるのはなかなかむつかしい。ただそうは言っても、ひところのベトナム報道——ことにホー・チミン市の報道によくあったように、人びとが秘密警察の影におびえておびえた顔でヒソヒソ声で話し、物がなくて米もろくに食えないという状態では決してないのはたしかな事実として言えることだと私は思う。あるいは、国民全員が今すぐにでもボートに乗って逃げ出したがっているとも、若者が

徴兵でカンプチアに連れて行かれるのをおそれて逃げまわっているというようなこともまずないものと見てとってよいようだ。

ベトナム戦争のあいだに、あまりにもベトナムを持ち上げたこともあってか、このところのベトナムについての人びとの認識には、ことさらにベトナムのもろもろをマイナス価値としてとらえたがる傾向があって、その傾向は、ことにこれは日本で顕著に見られる現象だが、かえってかつてベトナム反戦運動に真剣に取り組んだ人たちのあいだで大きかったりする。先日も今もってホー・チミン市に存在する麻薬中毒患者のことを話していて、彼らのなかにはチュー政権時代の兵隊がかなりの数いて、その連中は麻薬中毒になれば除隊できるというので麻薬を始めたと言ったら、運動のもと活動家が早合点して、「なるほど、徴兵でカンボジアに連れて行かれるので麻薬をするんですね」と打てばひびくように言ったのにはおどろいた。彼の想像するようなベトナム社会は、それこそ秘密警察のたえざる影に人びとがおびえている社会だろうが（そうした社会は、まさにポル・ポト氏のかつてのカンプチアの社会だった）、チマタにゴロゴロしている若者をつかまえるとなったら、ある党の中堅幹部曰く、「そんなことをしたら、オダさん、サイゴン全市民をつかまえることになりますよ。そんなケイサツ力はどこにあります」とまことにテンタンとしたことを言った。

ここらあたりややこしいところで彼らも頭を悩ましていることなのにちがいないが、さっきのネコ屋の存在、そのネコ屋との対話、及び私が闇ドルにつけた註釈によって示されている通り、活力にしろ自由にしろ、ゆとり、くつろぎにしろ、それはたちまち人間のさがとしてだらけ、ゆるみ、いや、もっときついことばを使って言うなら堕落に結びついて行く可能性を無限にはらんでいるにちがいな

い。これは何もネコ屋のオッサンのようなチマタの人びとだけにあてはまることがらではなくてかつての「抗仏闘争」「抗米闘争」の戦士たちにも、そして、その戦士たちが中核となってつくり出した政府、党のもろもろの人物たちにも的確にあてはまることなのにちがいない。彼らから、私は「人間ですから」ということばを、何度も聞いたが、元来は、彼らの社会主義の寛容を言いあらわすことばであるはずのそのことばが、自分たちの自堕落を弁護することばとして使われている形跡がなきにしもあらずだった。

ただ、これは逆にも言える。ポル・ポト氏の社会主義について、その主義主張の是非を論じることは今ここではさしひかえるにしても、ただひとつ確実に言えることは、それが徹底してこの「人間ですから」ということば、そのことばによって言いあらわされる思想を欠いたものであったことだ。そのポル・ポト氏の社会主義を自分の力によって押し倒したベトナムの社会主義はポル・ポト氏の道をとらぬことを内外に宣明した社会主義だったがゆえに、その「人間ですから」の問題に彼らは今まともに、そして、いやおうなしにむきあっていると言える。

7 しかし、彼らにとっては?——

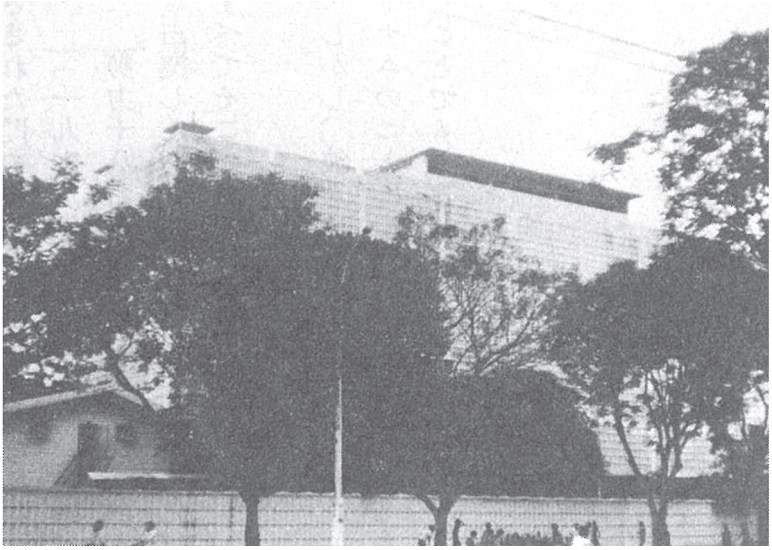
問題は山積している。彼ら自身が「私たちは危機にいます」と率直に語っていた。私はこの文章のなかで、ベトナムは「ふつうの国」になろうとしていると書いたが、まず、はたしてそうなれるだろうかという問題があるにちがいない。「こんな国って、あるでしょうか」という人もいた。ホー・チミン市が解放されたとき、人口はおよそ四百万。うち売笑婦が「常習犯」で十万、臨時の連中やらそ

れでメシを食っている「関連産業」までふくめて五十万。アメリカ合州国の兵隊たちがベトナムの女性に生ませて放り出して行った子供が南ベトナム全体で六十万。同じく南ベトナム全体で戦争未亡人が百万。戦争で障害者になった人間が三十六万。これはベトナム側が数えた数字ではない、アメリカ合州国側が数えたのだ（ただしホー・チミン市の売笑婦の数はベトナム側の数字）。さらに、これもベトナム側の数字だが、さっきの麻薬中毒患者が南ベトナム全体で五十万。ホー・チミン市に限って言えば、ショロン地区を中心に十五万人がいた。アメリカ合州国はそのころ年間五百億ドルを南ベトナムに投入していた。三百億ドルが直接の戦費で、あとの二百億ドルは南ベトナムに送り込んだ物資であったわけだが、すべてはアメリカ合州国から送り込まれて来たゆえに工業はほとんど育つことはなかった。そして、ある日、「解放」がやってきた。ということは、その数百億ドルがまったく来なくなったということだ。

これが「ふつうの国」になる？　たいへんなことだ。

「ふつうの国」になるのは、私たちにとって今なんでもないことのように見える。それをつまらないことだとさえ思うこともできる。しかし、彼らにとっては――という思いが私にはある。その思いは決して軽々しい思いではない。重い、重苦しい思いだ。これまでにいったい何人の人間が自分の生命までをも犠牲にしたのだろうかと思う。

ホー・チミン市のかつての大統領官邸（「北」の解放軍の戦車隊が入って、最初にたかだかと北ベトナムの国旗をかかげた場所だ）に通じる目抜きの大通りにひときわ目立つ白い大きな建物がある。



かつてのアメリカ合州国大使館の全景。１９６８年１月，ここに「解放戦線」の戦士たちは突入した。

そしてそのあたりにも民衆レベルの「私企業」の街頭レストランがいくつも店を開いているのだが、そのまわりに高い塀とトリデまがいの見張り所を持つビルディングは、その昔のアメリカ合州国大使館だった。解放にさきだって屋上から大使以下がヘリコプターで逃げ去ったという世にも名高い場所だが、さらにその数年前のテト攻勢にさいしては「南ベトナム民族解放戦線」の戦士たちが一時占拠した。閉ざされた門の横手の壁の標示に彼らのことが出ていた。

「一九六八年一月三十日午前三時、テト攻勢にさいしてサイゴン・ジャディン地区の武装勢力十八名が当大使館に攻撃を加え、長時間にわたって占拠した。」

占拠したあとの彼らのことはそこにはまったく触れられていないのだが、もちろん、彼らはすべてそこで殺されて死んだ。

しかし、彼らにとっては？――私はその思いから離れられない。その思いとともに、私はベトナムのことについて書き進めたい。それは自分たち日本人のこれまで、これからを考えて行くことでもある。

II　「オモテ」の理想と「ウラ」の活力

市場では今や何でも売っている。ハイフォンで。

1　しかし、私たちはくらしていた

歴史はときどき皮肉な芸当をするものだが、私自身にかかわって言うと、私がベトナムやカンプチアの今の社会のありようについて、戦後生まれ、戦後育ちの人にくらべてまだしもよく理解できるように思えるのは、戦後のどさくさ、大混乱、闇市など第二次大戦直後の空気をしこたま吸って育った世代の人間であるからのようだ。その点になると、そういう空気が精神形成に多大の役割をしなかった私より年長の「戦前派」もベトナム、カンプチア理解において、もちろんこれは今の両者の社会状況に限って言っていることだが、力劣れるところがあるように思えてならない。「戦前派」にしろ、「戦後派」、あるいは、「戦無派」にしろ、理解がいささかまっとうすぎるのではないか。

たとえば、ベトナムはホー・チミン市で、街頭で売るアヒル肉入りウドンが一杯三十ドンするということになると、国家公務員の中堅幹部クラス（どこかの省の副局長というほどの格だ）で三百ドン、たいていのお役人が百ドンという月給ではとうてい食えるはずはないのにけっこうお役人も食っている、まことにマカ不思議――というふうな報道記事を私は読んだことがあるが、あの「戦後」の闇市時代、ミツビシ、大蔵省のえらいさんの月給ではメザシも数尾しか買えぬという社会においても、私たち日本人はメザシだってどうにか食いながらまことにたくましく生き抜いていたのだ。

そうやって生き抜いて来たからこそ私は今日こうやってこの文章を書いているのだが、あのとき、「進駐軍」として日本にやって来ていたアメリカ合州国人諸氏は、メザシ数尾分の月給でどうやって一家六人、七人、八人（あのころは思えば子供の数も多かったものだ。ベトナム並み、いや、それに

近いと言ってよいのではないか）がくらしを立てられるのかといぶかしんでいたにちがいない。私だって、今から考えると、まさにそれはマカ不思議だ。

しかし、私たちはくらしていたのである。メザシもときには食って。――

次に、これはかつて開高健氏が私にしきりに主張していたことなのでこの理論の発見者はあくまで彼だと言っておきたいのだが、その理論というのは闇市起源、もしくは創始にかかわっての理論だ。童話には魔法の杖のひと突きという現象がある。魔法使いの老婆がトンとそのたずさえ持ったる杖で大地をひと突きすれば森羅万象たちまち地上に立ち現われるというたぐいの話だが、開高氏に言わせると、闇市の出現はまさにそんな瞬時、瞬間的感覚のものであったゆえに、そこにはぜひとも闇市老婆の杖のひと突きがなくてはならない。

私にもその感覚があって、いくさ終ってまもなくのある日、ふと通りかかった近くの駅前の強制疎開跡（と言っても、今の読者にはお判りにならない人が多くなっているにちがいない。要するに、空襲にそなえて、駅その他「重要建築物」のまわりの「不要不急」建物の住民を追い出して、家をぶっこわして延焼防止用の空地をつくり出したのだ）に喧騒あって、何ごとならんとおそるおそる入ってみると、そこは巨大な露店市場のごとき空間であって、あるはあるはゼンザイ、オハギ、モチ、サカナ、おにぎり、あるいは、進駐軍の残飯シチュウのたぐい、それらがいくらでもあって、いったい、どうして一夜にしてこんなたくさん戦争中には影もかたちもなかったはずの物（ぶつ）が出て来たのか、私はまったくたまげたのであったが、ことの次第がそういうことになると、やはり、そこには魔法の杖のひと突きということがあってしかるべきだと考えるよりほかにはない。

2　闇市を通じてベトナムを理解する

三番目にわが「戦後」にかかわってぜひとも言っておきたいのは、こと大阪、神戸の闇市にかかわって言えば、そこで活躍した英雄たちがそれまで社会の下層にあえいでいた朝鮮人、中国人などであったという事実だ。この一事がよく示しているように、既得の権利、利益をカサに着て社会を支配していた大企業の屋台骨はゆらぎ、そこにつながる既存の中、大企業それぞれに落ち目になったおかげで、それまでコンリンザイ成功の甘い匂いをかぐ機会のなかった下積み、無名の人びとにとって、「戦後」はまたとないのし上りの千載一遇の機会となった。

こういう下剋上的状況が大いに自由の空気を社会にかもし出すことは当然のことであって、私は「戦後」の日本社会、文化にあっての自由の形成は、この闇市経済を基本にした自由なる経済活動（傍点注意。当時にくらべれば、すでに大企業の既得の権利、利益に基づき、その保全を第一として形成された当今の日本経済のありよう、秩序、いかに不自由きわまるものか）を抜きにしては考えられないものだとかねがね考察している。前者と後者、二つの自由は大いに相関関係にあったのだ。ここらあたり、社会学者、文化人類学者、思想史学者によく考えてもらいたいことだが、既存の貴族社会に対する新興ブルジョアジーの反逆、そこでの彼らの「エートス」の形成など、べつに昔の文献をあまたひもどかなくても、ついこのあいだわが「戦後」社会にもその例はこと欠かなかったような気がする。

そこへもって来て、この自由、決してまるっきりの無秩序を意味していなかった。かつて闇市経済に少年の身で参加した人間の証言として言うが、あまりのやらずぶったくりは身の破滅ともなったし、

なにしろ証文も契約もヘチマもない世の中のことだ、かえっていったん信ずればとことん信ずということもあったのは、華僑社会、あるいは、オナシスのごときギリシアの船主社会と同じことだったのではないか。そこへもって来て、闇市の英雄たちは遊びも遊んだが、よく働きもした。ここらもまた、新興ブルジョアジーの「エートス」に似ていなくもない。

四番目には、この闇市経済活動が日本経済そのものにあたえた活力の問題が来る。人はよく朝鮮戦争がその後の日本経済発展のための原始的蓄積の機会となったことを言うが、蓄積をするためにも原動力となる資金、活力、「エートス」が必要だったのではないか。そういう意味で、私は戦後の日本経済の発展を考えるにあたって、そこでの闇市経済の純経済学的考察が不可欠だと考えるのだが、誰かそういう野心的研究をやってのける新進気鋭の学徒はいないものか。私がこういうことを言うのは、逆にそちらのほうのメカニズムがよく判っていないと、ベトナム経済のことのありよう、その可能性（があるのか、ないのか）がよく判らないのではないかと考えるからだ。

3 「戦後」の類似

以上、長々と「戦後」――ことに闇市経済のことにかかわって書いて来たのは、今のベトナムのもろもろ、そちらのほうから考えて行くとよく判ることが多いからだが、第一の類似、三十ドンのウドンとわずか百ドンの給料との関係についてはすでに述べた。

第二の類似は魔法の杖のひと突きにかかわってのことだが、解放後、社会主義政策をかなり「南」でも強引にとり始めたとたんに姿を消した物資は、商売解禁とともにまさに魔法の杖のひと突き、チ

地べたの商売はますますさかん。ホー・チミン市で。

マタにあふれるように出て来て、手に入らぬ物は何もないというくらいまでになった。正規のルートでは絶対に手に入らぬはずの日本の電気製品の最新型のものまで、ホー・チミン市の街頭で売っていておどろいたと話す商社員に私はホー・チミン市で会ったことがあるから、推して知るべしである。もちろん、そんな不要不急の物よりかんじんなのは米だが、かつては米が無い無いと言って騒いでいたはずなのに、魔法の杖のひと突き、とにかく米も姿を現わすようになった。

第三の類似。かつての南ベトナムに「ミツビシ」があったわけではないが、「ガソリン・キング」、「ライス・キング」など、その道では王様クラスの企業家がいて経済を牛耳っていたのだが、そういう連中、何をおいても国外へ逃げてしまった。おかげで経済が自由になった。これまで王様クラスに頭を押さえつけられていた民衆レベルの企業家、商売人たち、これほど活発に金儲けに精を出せる時代はないのではないかというのが社会主義政府のえらいさん自身の判断だ。ここでの「エートス」――たとえば、無限のやらずぶったくりは許さぬというワク組みは、これは社会主義政府がつくっていて、言ってみれば、ここにあるのは社会主義的闇市経済だろう。そして、この自由なる闇市経済活動が社会、文化にわたって何がしか自由の空気をみなぎらせることに役立っていると私は見た。

第四。これではたして経済発展がこれからできて行くのか。これはこれからの課題だろう。すくなくとも、刺戟はそこで大いにあたえられている。

4 二つの経済の「善悪」の結合

手っとり早く言えば、今のベトナムには社会主義経済と自由主義経済（資本主義経済と言うよりまさしく自由主義経済だ。そうまさに適切に言えるにちがいない）の二つが存在している。かつての北ベトナムに所属する部分でも、前者七に対して後者三というのが大ざっぱなところでの比率だとはベトナムのいろんな人の話を総合しての私の判断だが、それが南ベトナム――かつてそちらに属した部分となると、前者はまだやっと始まったばかりだ。

こういう二つの経済の共存、あるいは、混在の根本にある考えは、社会主義経済に内在するはずの

「根本的善」に自由主義経済が持つ「現象的善」を結びつけて経済を発展させようとするというものであるにちがいない。ここで言う社会主義経済の「根本的善」とは、その社会の人間みんながとにかくメシを食える、みんなが働く、それゆえに、搾取がない、平等である、働けなくなっても生きて行ける、そう社会がしくみをつくっている――というようなことであって、「生産手段の社会有」というたぐいのことはその「善」に至る手だてにすぎない。さて、それでは、もう一方の自由主義経済の「現象的善」とは何か。競争心、金儲け欲がいい結果を生み出すこともある。おかげでみんなよく働く。技術水準も高くなる。ベトナムといわずかつてはこうしたものに徹底して背を向けていた中国までをもふくめて、社会主義国がこうした考えに今はもうすべて従っているように見える。だが、その実践の結果は、自由主義経済に内在する「根本的悪」（さきの社会主義経済の「善」にかかわって列挙した徳（バーチュ）と正反対のものを考えればよい）に社会主義経済の「現象的悪」（たとえば、人間みんな平等、メシが食えるということはえてして、よく働かぬ、生産意欲がない……ということになる）を結びつけたものに終らないともかぎらない。

これは今や社会主義国がおしなべて持つ危険だが、私が二つの経済的共存、混在の中心ホー・チミン市のえらいさんたちにそう言うと、まさにその通りである、成功と失敗は五分五分であるとためらわずに言った。もっとも、私が今述べたのは、他のもっと落ちついた社会主義国をふくめて全社会主義国にかかわって総論的に言えることであって、ベトナムの場合は、社会主義経済に内在するはずの「根本的善」に闇市の活力の「現象的善」を結びつけて経済発展をはかろうとするのが、下手をすると両者の「悪」が結合する結果に終りはしないか――と言ったほうがさらに適切かも知れない。

ここでまとめ上げて言うと、今中国をふくめて社会主義国がおしなべてとっている道は、ある程度の金儲けは許すがそれが絶対に資本家にはならない、ならせない道で、これが紆余曲折いろいろあって社会主義国が今たどりついたひとつの結論であるようだ。これはあとでもう少しくわしく考えて行きたいことがらなのだが、さっき述べた失敗の可能性をふくみ込みながら、このところたてつづけに社会主義国を訪れる機会の多かった（ベトナムから帰ったあとも、私は機会があって今やおたがい最悪の「敵」どうしとなった中国へ出かけた）私にこれがもっとも人間の性（さが）にふさわしい道でないかと見えるのは、金儲けの自由とようやく社会主義国社会にもただよい始めた市民的自由の空気とが決して無関係なものでないと思えるからだ。

私には経済活動というものも、それが人間のいとなみの結果である以上、もう少しそうした人間の精神の動きと結びつけたかたちで考えて行きたい気持があるのだが、これは長年の世界のほっつき歩きの体験から得た実践的結論だ。何も闇市の自由、金儲けの自由のことだけを言おうとしているのではない。たとえば、最近の世界の経済、政治の動向を大きく動かして来た石油の価格の大幅な上昇（つい最近は、逆に下落ぎみだが、それだって昔にくらべると、たいへんな高値だし、いつなんどき、また途方もない事態になるかも知れない）についても、パレスチナの無名の、無数の人びとの自由と解放を求める闘争がアラブ世界の自覚をうながし、自信をあたえ、この自覚と自信が第四次中東戦争における「石油戦略」の発動ともなれば、「第三世界」にまでことを大きくひろげて「ＯＰＥＣ」（石油輸出国機構）の結束を固めて石油価格の上昇を求める大衆団交的行動の契機となったことを見逃してはならない。もちろん、そこには多国籍企業の策動もあった。しかし、ことは決してそれだけで動い

たのではない。

そして、もうひとつ言うなら、実状認識を手がかりとして社会主義論をかたちづくる代わりに、社会主義国の実状認識を放擲して、ああでもないこうでもないと哲学的考察にふける社会主義論もいいかげんで願い下げにしたいものだ。私にとってマルクスの『資本論』の魅力は、その理論の展開もさることながら、それが徹底した資本主義の「ケース・スタディ」に基づいていることにあるのだが、私に言わせると、マルクス今この世にあらば、彼は同じように徹底した社会主義国の「ケース・スタディ」をやってのけた上で「社会（主義）論」を書くにちがいない。既存の社会主義国、すべてこれ堕落の極地、理想の社会主義はわが哲学のうちにありとうそぶく代わりに、彼はきっとそうしたことだろうと思う。

5　闇市と社会主義経済

さて、社会主義経済と自由主義経済の共存、混在による経済の活性化――これはまさしくかつて「ネップ」が狙ったことであったが、「戦後」を生きて来た生活者の私には、そういう古典的事例で語るより、やはり、「戦後」の体験で語ったほうが適切であるような気がする。もっとダイナミック、アウトロー的に言えば、そして、ベトナムの今のありよう、そういうダイナミック、アウトロー的なフンイ気が多分にただようものであってそこでまさに活性化しようとしているのが、闇市の活力を使っての社会主義経済の活性化だ。

二つの経済の共存、混在と言うと何やら異様な感じがして来るが、考えてみると、戦後の日本にも、

人間がいわば「公定価格」で生きていた、そのはずになっていたオモテの統制経済の世界（メザシ数尾の月給の世界だ）と、ウラの「闇市価格」の経済世界とがあって、私たち人間はそのオモテとウラの二つの経済世界を行ったり来たりして、それでようやく生きていたのだし、大きく言えば国全体の経済もその二つの世界の行き来、あるいは使いわけによって動いていたのではないか。前者のオモテの統制経済の世界は一種の社会主義経済と言えなくもないのだから、私たちもまた、ベトナムの二つの経済の共存、混在をとにもかくにも生き抜いて来たと言ってたいして無理はないにちがいない。そして、たしかに経済全体の活性化という点においては、これもまた、とにもかくにもかなり成功したのではないか。対比を極端にまで推し進めるつもりはさらさらないが、ただ、ベトナムの経済のありよう、あるいは、今の社会主義国経済のありよう、それを自分の経済のありようからかけ離れたものとして考えるよりはもっと身近にひきつけて考えるほうが建設的だと私は考えるのだ。

二様の経済の共存、混在、それに基づいての日本経済の活性化と言ったところで、もちろん、これは誰かが考えてやり出したことではない。オモテに対してウラが勝手に出て来たのにすぎない現象だが、ベトナムの場合を見ていても、南ベトナムの解放なったあと、社会主義を「国是」とするベトナムがやり出そうとしたことが社会主義経済というオモテの経済であったのは言うまでもないことだろう。もちろん、海千山千のベトナムの当局者のことだ、それをポル・ポト氏式に強行するという愚をとらなかったにしても、根本のところでその政策の根にあったのは、やはり、オモテの経済を貫通させることだったのは理の当然のことだ。しかし、それはうまく行かなかった。南ベトナムという地、ベトナム当局者以上に海千山千のサムライのあまたいるところだったからという事情もあってにちが

いないが、たちまち、経済のもととなる物資は姿を消し、オモテの世界の強行はウラの世界を生み出し、元気づけるという結果に終った。

そこで海千山千の当局者が、このウラの世界を彼らの社会主義経済のなかにとり込むことを考え始めたとしてもふしぎはないだろう。ポル・ポト氏一統なら、こういうときウラの世界の徹底的物理的殲滅をはかったにちがいないが、そこはフランスをへこませ世界最大の強国アメリカ合州国を打ち破った海千山千のベトナム人のことだ、彼らは状況を逆手にとってウラの世界のとり込みを始めた。どういうことを実際にやったかと言うと、まず、ウラの世界の合法化だ。つまり、オモテの社会主義経済から見ればウラの活動とみなされる個人的金儲けを大幅に許し、それを「公認」のものにし、ただ、大きく金儲けは許すが、資本家にならない、ならせないワクははめる。この政策を行なうにあたって好都合なのは、「……キング」の王様クラスの金持たちはすでに国外に出ていたという事情だろう。もっと小型の王様は「公私合営」というかたちで、ワクをはめた。

こういう点、ウラはあくまでウラとしておいておいた「戦後」の日本の当局者より大胆、率直、積極的と言えなくもないが、もうひとつ、「戦後」の日本と大きくちがうのは、「戦後」の日本にあっては、「公定価格」のオモテの世界では人間は生きられるはずはなかったのに、当局者は手をこまねいて何もしなかったのに対して、ベトナムの当局者はオモテの世界で生きる人間には何とかそこだけで生きられるように手だてをつくそうとしていることだ。

つづきは製品版でお読みください。